

2021年5月19日

小山 涉 個展「心臓が動いている The Heart is Beating」によせて

田辺 裕子

初めて会ったとき、心霊スポットの映像を壁に映してそこに幽霊をさがすというのをやっています、と小山さんは自己紹介した。これは“貧しい洞窟の幻”(2015)という作品のことであった。そもそもおばけは存在するのか？そしてその姿はとらえられるのか？そんなことを呑気に考えたことを思い出して、デカメロンに向かった。

わたしは誰かという、演劇を実践的に研究しようとしている人間で、「演劇」も「実践」も「研究」もなかなかはっきりとつかめずに迷子になること数年、今は大学院に籍を置きながらアートギャラリーのアシスタントをし、英語の先生をやりながらコミュニティスペースを運営しているという、とっちらかった28歳である。七転八倒した甲斐あって、最近やっと自分の思い描く「演劇の実践的研究」がなんなのか整理がつき、目の前がひらけてきたけど、小山さんと知り合ったのはまだ霧がどんどん濃くなっていくような頃だったと思う。創作や研究についていろんなことを話してきたので、今回の展示についての作文を依頼された。

在るのかわからないし、在るとしても写るかわからないもの、「おばけ」。今回の展示でも小山さんは「おばけ探し」に取り組んでいると思う。会場では、心臓、呼吸、煙、火、光、というイメージの連想が、5つの作品をゆるやかに結びつけている。

階段を一段いちだん上がるにつれて“火の会話 / Fire Dialogue”という作品が見えてくる。同じ構図の写真が何枚も並んでいて、ふたりの人が煙草をくわえ、それをくつつけている。スモーカーはこうやって火をわけることがあるらしい。互いが同時に吸い込むと火が強くなり、その小さな赤で相手の生を確認する。

生きていること、命があること、そういうことを実感する場面として一般的に思い浮かぶのは、たとえば痛みを感じるとか、怒りが爆発するとか、すごく嬉しいとか、なにかを強く欲するとか、そういった強烈な感覚が湧いたときではないだろうか。しかし煙草の火で確かめられるのは小さく弱く瑣末で単純な生で、生ってもっと確からしいものだと思っていたけれど、この作品では、相手がいま確かに息を吸ったのだというだけの、ずいぶんとちっぽけで心許ないものとして表現されている。

その対角線上、会場の一番奥の角には“最期の1分 / Last minute”という映像作品がある。自分が死んだあとにみんながこれを見るだろうという設定で、とても真剣に自撮りしている、遺言のビデオだ。それも1本ではなく、何種類も、様々な場面で撮影したものを繋げている。一方で、遺言の撮影を繰り返すことで死がどんどん重大で決定的なもののように感じ、他方で、その言葉の大切さや有効性が薄れてきて、死の深刻さを受け止めることに飽きてくるような感じもある。

死や生を哲学的に複雑化するのではなく、喫煙や自撮りといった俗っぽい動作でアプローチする。小山さんは、あえて物理的で素朴な手立てを用いることで、どこか滑稽で可笑しく、しかしなんとも不条理で物悲しいような作品を生み出している。在るのかわからないし、在るとしても写るかわからないもの、そこに愚直に取り組む道化的態度に、さらに精神障害というテーマが加わると、どんな広がりをもたらされるのだろうか。

5つの作品のなかで一番大きく上映されている表題作“心臓が動いている / The Heart is

Beating”は、川上さんという精神科医が、精神科医になる前に経験したお姉さんの死について話すというものである。作品タイトルは、お姉さんがお母さんに突然尋ねたことに由来していて、結果的にそれがお姉さんから聞いた最後の言葉になった。

この映像作品の経緯を少しふまえると、すべてがあらかじめ計画されて撮影されたわけではなく、まず小山さんと川上さん、2人のためだけのプロジェクトとして対話を重ね始めたらしい。腹の探り合いのすえに2人が行き着いたのが、お姉さんについて、川上さんがカルテと手紙を書くというものだった。

川上さんにとっては、お姉さんの最期も、お姉さんが生きているあいだ感じていたことや考えていたことも、どちらも手がかりの少ない不確かなことで、亡くしたことの悲しみそれ自体まで異化するほどの問いとなって渦巻いている。見ている人もその渦に招かれ、時間をかけてじっくり川上さんの言葉に耳を傾けているうちに、いつのまにか一緒にお姉さんのことを考えている気持ちになる。

サウンド・インスタレーション“もっと光を？/Mehr Licht？”では、統合失調症を抱えながら主婦業をこなす女性の声をじっと聴く。いたって一般的な家事の話題が続くなか、ちらっと服薬のことが関わってくる。彼女は、外側から与えられる社会的役割をこなすことで常人に収まりながら、内側に湧き起こるエネルギーの表出先を探し求めている。自由や開放を渴望しながらも、それを行動に移した瞬間に問題になってしまう。パートナーや担当医の目を十分に理解しているからこそ、自分らしさを抑えて病人としてわきまえてしまう、そのもどかしさが語りの端々に滲む。

精神障害というものが、小山さんの創作において欠かせないテーマであることは明らかだが、そこには語るという行為が鍵となっているようだ。今回展示されている2作品はどちらも人の話に焦点を当てるものだし、“社会は夢の共同体-みえないものを語る-” (2019)や、“社会は夢の共同体-私たちはまともを装う-” (2020)など、小山さんが過去に制作した精神障害にかかわる作品においても、その体験や社会との乖離を言葉にする様子を扱ったものがある。

障害について語るということがどんな歴史的意味を持っているのかふまえておいてもいいかもしれない。1970年代、それまで「障害は個々人が抱えているもので、自分の身体や精神のうちに在る障害は医師によって治療してもらうものである」という、障害の「医学モデル」と言われる考え方が支配的だったが、これに異議を唱える運動が起こる。脳性麻痺者の全国的な集まりである「青い芝の会」などがよく知られているが、身体障害者による社会運動によって、もっと多くの場面で障害のある身体を想定して社会をつくるべきだという考え方が、すなわち障害の「社会モデル」が広まっていった。英語圏でも、医療の対象になるような困難をimpairment、特定の身体の特徴を実社会が想定していないときに生まれる困難をdisabilityと言って区別する。さらに、当事者研究という活動が注目されて久しい。北海道にある「浦河べてるの家」で精神障害とともに生活を送る人々のあいだで始まったもので、自分が経験している苦勞について言葉にして他者に共有するという営みである。

自分が直面した不快な謎について、その意味をあれやこれや考え、調べたり、相談したりして整理しようとするのは、どんな人でも悩んだときにやることだと思う。しかし、医師に身を預けることしかできなかったことをふまえれば、障害や病気の当事者たちが自分の状態を自分自身の言葉で語ることの意義がとても大きなものであることが実感できるだろう。

当事者研究は、自助グループと違い、特定の障害や病気の当事者だけで集まるとは限らない。異なる障害や病気の当事者であっても、あるいははっきりとした診断を受けていない

人でも、「苦勞」というテーマのもとに語り合いの場に参加することができる。わたしの苦勞は隣の人にとってはおおごとではなく、逆に隣の人苦勞が、わたしには平気だったりする、そういう当事者/非当事者を超えた輪のなかで苦勞を共有すると、遡及的に「障害」はどこにあるのか、そもそも「健常」とはなにか、「治る」とはどういうことか、という問いを一緒に考えられる関係になっていく。

在るのかわからないし、在るとしても写るかわからないもの。そこに愚直に取り組む道化的態度に精神障害というテーマが加わると、どんな広がりをもたらされるのだろう。この問いにこの文章内で十分に応えることはできなさそうなのだが、少なくとも、精神障害の語り、小山さんの「おばけ探し」と通じるものであるということはいえると思う。探究技法としての病、とでもいえるものを、精神障害とともに生きる人々に見出しているのではないだろうか。

あなたと私は煙のなかで遭遇するばかりで、このどこかになにか確かなものがあるはずだけれど、煙のせいでそれは不確かなままである。あなたとわたしのあいだのどこかにある不確かな確かさについて、不恰好な体勢で手を前に伸ばし、探ることしか、わたしたちにはできないことはない。しかしそこに束の間のリアリティが湧く。在るのかわからないし、とらえられるのかわからないものについて、わたしとあなたが手を弄っているときだけ。

プロフィール 田辺裕子(たなべ・ひろこ)

演劇研究者。実生活と芸術作品の接点に関心を持ち、一方の極に戯曲の分析、もう一方の極にコミュニティ・スペースの運営を据え、その往来のなかで考察を深めている。作品制作のマネジメント・アシスタントや、打楽器演奏会の演出助手兼ドラマトゥルクとしてさまざまな現場に関わり、現在は東京大学大学院に在籍しながら、エルメス財団によるアートギャラリー・銀座メゾンエルメス フォーラムの運営アシスタントを務める。(コミュニティ・スペースにご関心がおありのかたは、[tankyusuruie](#)で検索してみてください。上池袋にある木造一軒家です。)